

勤儉尚武と物理的着眼との関係（承前）：論説

著者	福井，彦次郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 6
ページ	1 - 7
発行年	1895-05-07
URL	http://hdl.handle.net/2298/4561

龍南會雜誌第叁拾六號

論 說

勤儉尙武と物理的着眼との關係 (承前)

教授 福井彦次郎

固有に、必要に、關係に、勤儉尙武の貴重なること此の如し。而も予輩、否か第二十世紀に入らんとする所の予輩、『此次は』の問題と始終せんとする所の予輩は、未だ之に満足すること能はざるあり。苟も人生あれば、其れ相當に何か境遇あらざるを得ず。此境遇より負かされざるは、則勤儉の精神にして、此境遇に勝つは、則尙武の精神あり。其れ然り。試に問はん、人生の境遇に於る、右の二件を具備せしめて止むべきや、不可被負、不可不勝の消積兩面以外、別に一頭地なき乎、兩面以上累して太極ありて之を一收せりや否や。予輩得て之を審かにせざれども、兩面以下には、確に一頭地ありて存す。他なし、境遇其物に通ずるの一條即是なり。境遇より負かされざることとは大切あるべく、又境遇に勝つことも大切あるべく、是れ論をしと雖も、何れにしても、境遇其物を看破することも、等しく大切に非ずや。吾人の負かされてはならぬ所の境遇其物の真相は如何、更に進みて吾人の勝たねばならぬ所の境遇其物の實況は如何、此等は多少先決問題たらすんば非ず。予輩の所謂物理的着眼の精神は畢竟此に在り。知彼知己と云ひ、審勢と云ひ、自然之數と云ふが如きは、皆之が一方面の稱呼たるに過ぎず。

之を實例に徴せん乎。全國の輿論が我が從軍者の兵站部等の不足に堪ゆる儉德を稱賛すると同時に、

一刻も早く此不足の補充を切望して止まざるが如き、眼醒しき活劇一方のみに心を奪はれずして、徐るに偵察隊や、衛生隊や、民政廳や、通譯官や、郵便局や、所在裡面的の運動に耳を傾くるが如き、兵器の精粗、道路の良悪、防塞具の適否等に視察を怠らざるが如き、一步を進めて聞々其れ相應の工夫を献せんとするが如き、要するに最も見易きの例にして、實に邦人の物理的着眼を肥へゑたること少小ならず。想ふに、戦争後の本邦教育は、此點に在て一生面を開き來るや必せり。

近く之を熊本の狀況に問はん乎。西南之役に當りて、彼の熊本隊が何等の活動を演じたるかは、衆人の稔聞する所あり。予輩は曾て之を其一部將に聞く、曰、「熊本人は、臺場を守るよは天下無双の上手と稱して差支あさも、夜撃は按外下手あり」と。今一人ありて、此言を速了して、「故に熊本人は夜撃が下手でも不苦」と論斷するが如きあらば、吾人は之を如何に評すべき、兎に角物理的着眼は之を排斥するに躊躇せざるべし。物理的着眼は決して小成に安んずるを許さず。熊本人に切望するに、相成るべくば、併せて天下無双の夜撃家たらんことを以てするあり。成程「夜撃にも上手にならんと汲々するあらば、其れこそ未だ十人並に達せざるに先ち、早くも持前の臺場守が下手になりはせぬか、所謂此も取らず、蜂も取らざるの不首尾に終りはせぬ」との心配は尤千萬あれども、高く物理的着眼より見通はせば、詰まり一を知りて二を知らざるの譏を免れざるに似たり。物理的着眼に、固より偏するものにも非ざれば、又黨するものにも非ず、或る意味より云へば、物理的着眼は、取りも直さず、冷々の着眼なり。人ありて、「臺場守一方の名人と、臺場守兼夜撃二方の名人と闘は、孰れが負くるや」と問は、物理的着眼は冷々然宣告し去らんのみ。曰「臺場守一方の名人が負くる」と。別段氣の毒とも何とも思はざるあり。物理的着眼は、元來分業の發達に重きを置くものあれば、此點より云

へば、臺塲守の名人を強ひて、夜撃の名人たらしめんとするの迂愚を知らざるに非ず。一長一短は宇宙の大理、其の臺塲守れ名人たるは、幾分か夜撃の下手の証據とも見らるべく、又其の夜撃の名人たるは幾分か臺塲守の下手の証據とも見らるべし。斯かる証據は、証據として之を首肯する裡にも、物理的着眼には、亦自ら一種進取力のあるあり。苟も臺塲守兼夜撃二方の名人は、到底世に現れ來らじとの確理に遭遇せざる限りは、物理的着眼は、之を世に現れ來らしめんと熱望するあり。冷たるべき所には冷たり、熱たるべき所には熱たり、是れ物理的着眼の物理的着眼たる所以なり。之を要するに、物理的着眼は、分業の發達を期すると同時に、可及的、何にまれ、彼にまれ、多々倍々辨じ切るが如き力量の發達を期するあり。更に之を補約すれば、

(甲)臺塲守れ名人ある以上は、夜撃は下手にても不苦。

(乙)臺塲守の名人あるに搗てゝ加へて、夜撃の名人を期せざるべからず。

(丙)臺塲守の名人なる以上は、一層名人とあるの工夫を怠らざるの傍ら、徐々に夜撃の名人とあるの工夫をも凝らさるべからず。

物理的着眼の注文する所は、(乙)よりは寧ろ(丙)に在り、至極六ヶ敷き注文はあれども致し方なし。

六ヶ敷と云へば六ヶ敷、致し方なしと云へば致方なし、其れ然り、物理的着眼は、好んで斯かる注文を爲すものに非ず。其種類の境遇は、吾人稱して戦等と云ふ。人生の之に處するや、臺塲守の一長を以て甘んせんよりは、更に進みて夜撃ある他の一長をも併有せんと欲するところ理の當然に非ずや。若夫れ併有の方法は、後なる一長は急進し、其代りに先ある一長は、知らず識らず、漸退するが如き有名無實あるべからず。一言以て之を盡くせり。曰、漸進、一長よりは二長、二長よりは三長と數量のみ進むが

抑も漸進乎。否も否な、數量も進み、品質も進むの謂あり是れ豈一朝一夕の能くする所あらんや。

更に。阜近の事柄に就いて看來らん、其の航海に際して、上方育ちの婦人は、船に酔はぬ禁厭マシナイは如何する、酔ふたるときは服薬は如何する等、心配百出し、曰何、曰何、多忙も亦極まり、是れ所謂物理的着眼に富むもの歟。熊本育ちの婦人は按外平氣にて、此邊に對する豫防の何たるを知らざるもの多し、是れ所謂物理的着眼に乏きもの歟。二者何れも非あり。此平氣に加ふるに、彼豫防を以てする、是れ即物理的着眼なり。東京流の車夫は、夜中たりとも、何時を嫌はず命に應ず、熊本流の車夫と然らず、御出入先きに非ざれば、往々十時後は斷はる。蓋し錢使ひ荒え、故に何時を嫌はず命に應ず。錢使ひ荒らず、故に十時後は斷はる。何時を嫌はず命に應ず、故に錢使ひ荒し。十時後は斷はる、故に錢使ひ荒からず。所謂能く儲くる者は能く散じ、能く儲けざる者は能く散ぜざるの理に外ならず。物理的着眼は別段奇見あることなし、熊本流の車夫に望むには、十時後たりとも奮發えて命に應せんことを以てし、東京流の車夫に望むは、今少しく辛防して錢使ひを慎まんとことを以てす。何とあれば、物理的着眼は生計の程度が高まらんことを要求し、而して生計の程度は、之を外にして到底高むるの途なければあり。

他府縣よりの來住者、寧ろ其遊學者は、三人倚れば恐く言はん、『熊本の氣候の激變には困る』と。之を口にするは可あり、之を心に懸くるに至ては、抑も智惠のなき談に非ざる歟。少き様にて按外多きは卒業生の近況、此等年々歳々潮の如くに湧き來りつゝある卒業生が、揃ひも揃ふて、皆々氣候の良き土地に就職し得るは、到底望まき沙汰あり、其幾分は氣候の良否に頓着せず、決然去りて海外に従事せざるを得ざるに至るは、明々白々あり、差向き多望あるは朝鮮あらん、其朝鮮の氣候は激變の一、

事に至ては、熊本の比に非ざるが如し、實に朝鮮の氣候に對する稽古場と悟れば、熊本の氣候は歡迎すべきの氣候なり。轉びても土を握りて起さるゝの譬に洩れず。惡氣候に處しては、一層の惡氣候に準備す、亦佳ならずや。瘦我慢と云は、云へ、詰まり物理的着眼の大あるものに非ずや。廢物利用は物理的着眼の得意とする所、熊本の氣候は、或る點に於て、果して外來者に取りて廢物と一般なる乎、何れぞ直に之を利用せざる。

激變談漸く酣に迄て赤痢談に入る。曰『熊本の赤痢には困る』と、如何にも、誠に困る。之が豫防法は如何、各自銘々の豫防法は如何、赤痢利用法の有無は別途の研究に付し、豫防の眞法は如何。無用の婆言、分り切りたる贅言に外ならざれども、一ヶ條として、予輩は繰返へさゝるを得ざるものあり。曰『雜誌に耽りて夜深かしすべからざる事』、十時過ぎ……間食……鼾聲如雷……腹部露出……而して露出の頃が丁度例の熊本名物『激變』の夜明ヶ方あり。餘程の用心家すら時をらす冷氣に避易すること毎々有之、況や此等貪食者流に於てをや、其の赤鬼の乗する所とあらざるは仕合せあり。物理的着眼の本題に於る、近頃の所謂『衛生』よりは、寧ろ舊來の『養生』に重きを置かんとす。衛生々々と只管外部の防禦に騒き廻り、燈臺下暗、心中頗りに疑々々するが如きは、物理的着眼の取らざる所あり。養生即養生と解するが却て最大秘訣なるあからんや。之を要するに、物理的着眼は、一方には神經的に赤痢の名に聞き怕ぢするを戒め、他の一方には雜誌的に夜深かしするの類を戒む。聞き怕ぢしがら夜深かしするは、彼の耳を掩ふて鈴を盗むと相距る果して幾何。

以上の數例は、略ぼ予輩の所謂物理的着眼の何たるを明示し得たりと覺ゆ。今本段を結ぶに臨み、斯邊鎮氏の所説に及ぼさん。其略に曰、物理的に某行爲の進歩せると否やとを檢定せんと欲せば、宜く

之を内に見て畫否と團否と駁否との三點は如何、之を外に對して平否は如何、以上四ヶ條を突留むべし。畫とは畫定の謂にして、某行爲が判然一定の常形を有し、茫漠に流れざるを云ひ、團とは團合の謂にして、某行爲の前後諸件に於る、支離滅裂に歸せず、相互に能く纏り、其間に自ら一條の脉理あるを云ひ、駁とは駁雜の謂にして、某行爲の摸様が一色に限られずして、種々雜多の異色より成り立つを云ふ。而して某行爲が、能く畫定し、團合し、駁雜せるも、苟も境遇に對して適應を欠ぐが如きあらば、未だ絶妙とは言ひ難し、平とは取りも直さず此適應の事にて衡平の謂と。

本説を假りて之を氣候激變の前例に適用せんに、激變に處するにも、自ら一定の程度⁽⁵⁾あることを察知し、徒らに神經を勞⁽¹⁰⁾まることとなく、又之に反して、夜明け方の準備を無用視する等一切心配せざるの極⁽⁹⁾に陷むることとなく、過ぐるにも非ず、及ばざるにも非ず、自ら正中を誤らざるは、是れ畫定的着眼あり。近くは赤痢の豫防を思ひ、遠くは他年の就職に慮り、激變其事を孤立視せざるは、是れ團合的着眼あり。衛生々々と肉體一偏より騒ぎ廻はることとなく、去り迎病氣に罹るは渾べて心の業ありと輕斷し、肉體的作用を不問に付するが如き一方向きに馳することなく、衛生と養神との相異れる兩面より豫防を講ずるは、是れ駁雜的着眼あり。以上の三着眼にして、如何程宜きを得たりとするも、萬一已が健康を卒ひて、此激變に馴らざしむるの力なきときは、此等折角の着眼も徒勞の感なき能はず。之を要するに、三着眼は、畢竟已が健康と激變との間に、自然の釣合ひを馴致する方法と過ぎず。由りて以て馴致を得んとするは、是れ衡平的着眼あり。

時正に第二十世紀に入らんとす、言者口を開けば輒ち曰文明曰文明と。一にも文明、二にも文明、觀じ來れば、予輩亦時流を趁ふの徒たるに過ぎず。以上段々の所見は、畢竟一部の文明論なるをからんや、

讀者幸に再思せよ。

世 態

素 要				
物理眼	尙武	勤儉	文弱	
	乏		文	假
乏	富	富		
富	富	乏	甲種	乙種
富	富	富	真	
			明	

(完 結)

教 育 雜 談

迂 行 道 人

行には迂にして、言にのこ敏き者かある。あつて人にそしられんと思へば、燒きすてん方然るべけれど、考へつることは、人にも問ふは、自ら進むる所以にこそあなれど、遂に愧を忍んで茲に教を乞ふことゝはあしぬ。四月十五日誌。

“Every person has two educations, one which he receives from others, and one, more important, which he gives himself” — *Gibbon*

教盲と云ふは、一も二もなく、唯教師より誘道啓發せらるゝの外、別に途なき如く思ふものあれど、之